

構成を中心として見た「本朝醉菩提」

鈴 木 敏 也

—

またしても「よみほん」談義。完成期に於ける讀本の仕組よろしく煩雜の限りである。安永二年建部綾足の『本朝水滸傳』が章回體傳奇物語の俑を作つてからも、在來の奇談式短篇集の一體は依然としてその存在を確保してゐるが、年を経ると共に影を潜め、讀本出版部數の上で大飛躍を見せた文化三年（三十二部刊行——「小説年表」に據る）から、絶頂を示す文化五年（七十部刊行）のあたりでは既に章回體式の獨占の實狀であつた。かく構成を主とするに到つた素因には、新彩と變化とを希求する人情の常で、舶載せる支那稗史の奇構に開眼せられたのと、歌舞伎との提携が大衆牽引に至大の魅力あるを感知したのと、この二點を擧ぐべきであると思ふ。勿論、戯曲的構想と小説的機構との藝術的限界は當時の讀書圈にとつては風馬牛であつた。時代風尙の趨くところ、駭目驚奇の幻實一如の世界に感興の飽滿を味得すれば足るのであつた。

1

かゝる型式の小説構成を完成した中心作家が京傳・馬琴である。馬琴が唐山の稗史を標榜して、普ねくわが國の史實野乘を拮據したのに對して、京傳は主として淨瑠璃歌舞伎に所縁し、且、民間傳説を涉獵し、『近世奇跡考』や『骨

董集』の著者らしい素材を集積し取捨するを常とした。今、こゝに採りあげた『本朝醉菩提』（上秩前編六冊、下秩後篇四冊。文化六年秋刊行）もまた此の傾向を代表するものである。

二

書名は明代の小説『醉菩提傳』（桃花庵醒齋？）に擬したものである。それは南宋の僧道濟の奇行を中心としてゐるので京傳はこれに酷似せる一休禪師の外傳らしく作爲して編述したのであつた。恰度此頃は後進の馬琴が降々たる聲名を博しつゝある時で京傳はこれに對する競争の意味もあり兩三年讀本から遠ざかつた點もあり、これまでの讀本中最も自信のあつた『稻妻表紙』を再びとりあげて、佐々木家の後日譚を草し、以て讀書界に酬いんとしたのである。従つて在來の作品より以上に「凝つたもの」であつた。尤も既に寶曆九年『通俗醉菩提』（二冊、天華藏主人）が出来て居たからたとへ原本が讀めなくともこれを拮据して取材する事は器用な京傳にとつては、さして困難な仕事ではなかつたと思はれる。しかも彼が原典に矚目してゐた事は肯定してよい。

この作の發端は、かの『稻妻表紙』との關聯を明らかにせんために布置したものであるが、作品全體の主眼を明らかにせんとて善惡因果序品の名を標示して居る。寛正の頃、山城愛宕郡六道の辻に野宿した飾曆曾根松と云ふ廻國の修行者があつた。秋草の亂るゝ中で蟲の音に耳傾けて居たが、計らず山蔭で管絃の調べを聞き、その方に心引かれて見返ると、夜霧が急に晴れて忽然と樓閣あらはれ、その中に一座の上臈らしき人を圍繞して由緒あるらしい武士の面々が密議をこらして居る體である。その物語に小耳をはさめば蜘蛛の方・不破道犬・同じく伴左衛門と名乗る人々ら

しく佐々木・名古屋・梅津などの家名をあけて、積る怨恨を晴さんための謀議の席と思はれた。しばらくあつて修羅の時が来たとして人々は騒ぎ立つたが、忽ち悪鬼どもが出現して、これらの人々を苛責する。その凄惨の相をまのあたり見た曾根松は、己が骨髓までも碎くる思ひをしたが、一陣の疾風と共に幻想は消滅して、もとの野原となつた。さてかの人々の呼びかはした姓名を考ふるに、何となく聞き覚えがあるやうなので不思議を感じつゝ佇む時、四人の乞食風の物取に襲はれたが、事ともせず叩きつけた後、鉦打ちならしつゝ東をさして立上つた。これだけが第一章の前半を占むる所謂序品に當り、醉菩提全體の作意はこゝに提撕されてゐる。而して後段に現はるゝ佐々木・名古屋・梅津の人々の運命の糸はこの總序に於ける怪奇な因果の糸に操つられて居るのである。

この序品に現はれた素材を一瞥すれば怪しき殿閣に於ける人物の動作態度とこれを包含する凄愴な気分とは直ちに『雨月物語』の「佛法僧」に於ける秀次一行の幽霊を聯想させ、従つて更に『伽婢子』に見える惠林寺の怪に想到せしめる。且獄卒苛責の敘述は地獄變相の圖から使噓されたものであるが『太平記』卷二十の「結城入道墜地獄」の條なども思ひ合はされ、特に室町期の草子『佛鬼軍』を看過する事は出来ない。これは一休の作と傳へられる點に於て一層感が深い。

三

この發端を冒頭として本文に入るが、そこに現はるゝものは大なる四個の説話層である。即ち(1)詫麻彦物と香晒との戀愛受難 (2)梅津嘉門の遺子の苦衷 (3)佐々木家の悲劇に絡む名古屋小山三の艱苦 (4)河内國酒屋又六の話これ

ある。これらは説話系列としては相錯綜する事淺く、むしろ一つ一つの説話層が相重疊して居るので、相互間の交渉と云ふ點から見れば偶然的に連關するだけである。しかし作者京傳はこれらの説話層をすべて同一の中軸に結合する事を忘れなかつた。即ち一休禪師を點出して主要の人物をその法衣の影に縫らしめた。換言すれば、四個の説話層は一体に懸垂して廻轉しつゝあるので、一篇の醉菩提が高僧外傳の風格を備へて居るのはこれがためである。

四

第一説話。卷一の「善惡因果序品」から卷二の前半「得失譬喩品」に至るまで。信濃の守護職望月家の臣に詫麻彦惣といふ若士が居た。殿の覺えもめでたかつたが奥方附の侍女香晒と私かに相契つた。あらはれて罪せられんとしたのを、奥方の情で二人は館を去り、香晒の父が大和に居るのを頼つて、遙かに尋ね寄つた。香晒の父は山蛭の洞九郎とて二上嶽に住む獵師で諱名なづなの示すやうな非道の老爺であつた。香晒は幼少の時、養女にやられ、そこから望月家に仕へたので、洞九郎はたゞ實父と云ふだけの事であつた。胸に一物ある父は、娘と婿とに安住の地を與へたが、やがて彦惣の病むや彼の亡き後は娘を賣つてよき寐酒を樂しまんと計つた。然るに、かねて洞九郎が奈良の鹿を殺した事が現はれて召捕られる。しかし身代金さへあらば死罪は免れるとの事であつた。彦惣は秘藏の名器肩衝の茶入を賣つて金を調達したけれど、使に行つた香晒は途中惡漢のために金を奪はれた。香晒は思案にくれたが、近隣の女岩芝の勸めに従ひ懐胎の子をおろして身賣せんと決心した。然るに突然あらはれたある修行者に金を恵まれ、父の罪贖ふ事を得た。それと同時に、香晒の金を奪つたのは岩芝の夫黒平であつた事があらはれて彼等は逐電する。

洞九郎は許されて歸宅したが獵師をやめた。けれどもその獵犬を他にゆづると號して悉く殺し、その皮を賣つた。五匹の犬を殺した時、その心火が虚空に飛び去るの奇異があつたが洞九郎は氣にもとめなかつた。香晒は程なく男子を生み落したが、夫の病状はかばかしからず、貧と病とで慘苦の生活をつゞけて居た。洞九郎は孫を養子にする事を發議し、彦惣夫婦は涙をのんで承諾するが、洞九郎はこれを捨子にして歸る。その途中、路傍に落ちた財布を拾つて七十兩を得た。

京の武士白炭忠知の臣穂坂垣右衛門はかの肩衝の茶入が賣物に出て居るので主命によつて購んとしたが、金を落しそれを搜しにもどると捨子を見た。立去らうとしたが、心引かるゝまゝに拾ひとつた。歸つて仔細を主人に語り、責任上自ら浪人する。さて洞九郎は峠の古社で拾つた金を數へて居ると、山賊があらはれたので格闘して遂に賊を殺し、その覆面をとると黒平であつた。彼が懐中の五十兩はさきに香晒から奪つたものである。しかしその時一匹の熊に襲はれ、共にぬけ道のない谷間に陥込んだ。生氣づいたけれど百二十兩の金を首にかけながら遂に窮死するに至る。この熊はさきに殺した獵犬の靈ののり移つたものと云ふ。一方では、父がいつまで経ても歸らないので、彦惣夫婦は已むなく堺の町に出で、夫は扇に繪を描き、妻は扇折りをして細々と暮したが、二年程経て一人の娘(小田井)を設けた。以上で彦惣香晒を中心とする説話は終る。堺に移住してからの後日譚は、他説話と交渉あるものとして暫く筆を收めたのであるが、此の説話の主人公を圍繞する色彩の濃厚な事件はこれまでゞ絶頂を過ぎたものと云はねばならぬ。即ち戀愛に絡む受難が層々高まり來り、これに纏はる挿話も、それ〴〵に白熱的變幻を見せて遂にある終局に達して居る。この間にあつて作者が最も意を用ひたのは香晒と洞九郎とであらう。香晒が父に仕へて孝、夫に對して貞の道

を固守するの態度は當代の理想的女性で、讀本の主眼とする道念を體得した典型人物に外ならない。而して彼女が形象の具體化は、洞九郎への命乞と彦惣の誠實に對する感謝と、更に岩芝の誘惑とが三巴を描いて渦巻き、これを説話展開のクライマックスとして旋轉する。かくて父の捕縛、夫の志による金の紛失、身賣の覺悟、胎兒の始末等の事象が相集積し來つて、香晒の一身を苛むとき、突如として救ひの手があらはれるが、これは偶發的でないにも眞實味に乏しい。しかし事件の一落着と共に、救ひの手の釋明を後に委ねて、讀者に半ばの安心と半ばの好奇心とを與へたまふ進行させた手法は、作家の奇巧を規つた獵手段と稱してよからう。

洞九郎は「惡の權化」として現はされて居る。最初一人娘を養女に賣り、禁制を犯して奈良の鹿を殺した。次で婿と娘の誠實と勞苦とによつて己が罪を償ひ歸るや、利得のために日頃手馴げた獵犬をも虐殺して了ふ。而して娘等が貧と病とのために苦しむや、養子先があると號してわが孫を捨子とする。すべてが徹底的に惡の道を身輕に走る男として現はされてゐる。かゝる所行の彼が黄金を首にしながら谷間に陥り餓死せんとして、しかも毒死するのは、天罰觀面として善惡因果品の一半を負擔したものである。しかし描敘から來る殘虐非道の印象は、むしろ稀薄であり、その殺人事件はたゞ兇賊黒平に對するだけで比較的惡業は寫されて居ない。たゞ山蛭の渾名によつて推測させるのと、鹿や犬を殺した事件があるのみで、作者が兇惡として讀者に訴へて居るわりにその具象性に乏しい。香晒を前にして空涙を流すところなどは穉拙な滑稽味の風貌さへ持つてゐる。その窮死も犬の怨靈によると云ふから、因果の程度も凡そ適應したものと云つてよい。要するに、洞九郎は豫定通りに作者の筆が廻らなかつた人物と評すべきであらう。彦惣は純眞誠實の士、黒平は一個の傀儡的人物、岩芝の姦佞もこゝでは單に片鱗をあらはしたのみで後段への伏

線をなすものであるが、後日の岩芝と對比するときは、その惡の色彩はこの一部では頗る密度が薄い。かの神崎の亡八橋六なるものが岩芝のために田圃に投げこまれる滑稽は、香晒に關する悲愁の諧調の昂まつた直後の事とて、一種ゆとりを與ふるものとして効果がある。

猶、香晒説話全般に亘つて感ずる事は、説話の敘述が梗概的でないと云ふ點である。初期の讀本はもとより、京傳時代になつても構想の複雑紛糾は、とかく説話の進行に急ぎ、詳しい梗概風に流れる事が多かつた。然るにこの一段はかなり敘述に細心の注意を拂ひ、行文と事件とに相應の潤ひを持たせて、場面々々の情趣を活かす事に苦心した痕跡が認められる。この點は京傳のために買つてやらなければなるまい。例へば初め香晒が彥惣を戀ふる思ひを敘したところ。大和に辿り着いた香晒が二上嶽の麓で幼時の思出に耽るあたり。洞九郎一家の山かせぎの敘述。香晒が夫の寢息を覗ひつゝ遺書を認める段の如きは、これである。しかしともすれば筆致が全然説明に流れて、思ふに胸毛の黒平は香晒が金を奪ひし報ひによりて洞九郎のために殺され、その金洞九郎が手に戻ると雖も、天罰洞九郎が貪慾非道を戒めて岩穴の囿ひまに落し入れ、身に數多の金を帯びながら世界に出づる事をなさしめず、又香晒は孝のために胎内の子を脱せんとて、菌キノコの汁を飲まんとせしに、却つてその子は恙なく、洞九郎が飢を凌ぎ命を助からん爲に食ひしは、却つてその毒に當りて死せし事、善惡邪正その報ひの細やかにして天の賞罰正しき事如此し、豈怖れざらんや」と云ふが如き、啓蒙訓誡の意圖は認めても、あまりに露骨であり率直にすぎる。

次に、この第一説話中の素材であるが、大筋だけに就て云へば大體創意によるとは云へ、類型的な姿態から脱却して居ない。その中に二三の所縁を指摘すれば、香晒が墮胎藥を飲まんとする時、表に當つて説教節を聞く、しかもそ

れが賽の河原の嬰兒を詠んだもので、暗に服藥を諷めるやうである。かく外面的には相互關係なくして、しかも内質上緊密なる交渉を保つ手法、即ち音樂の力にかりて人物心象を牽引するの趣向は、歌舞伎傳統のものとして珍らしくなく、現に京傳も『梅花氷裂』で長吉巡禮の場に用ひ、馬琴もこの前年（文化四年）『三七全傳南柯夢』の脊掛驛の場で多少の變化の下に試みて居るもので、芝居がりの大衆的興味を覘所とした趣向にすぎない。洞九郎の奈良の鹿殺しと、その後獵犬を殺すの筋はかの「石子詰」の説話によつたもので、所謂「十三鐘」の傳説を取入れて幾分の轉化を施したものである。「十三鐘」とは奈良東大寺の時刻トキの鐘に七ツと六ツとの間に撞くのがある。これが何時しか十三歳の子供が鹿を殺して石子詰の刑を受けたと云ふ附會の傳説を生じ、元祿頃には既に流布して居たものと見え、近松門左衛門の作、朔田金四郎、山本嘉市調の上方唄が出来て居り、享保十三年豊竹座の淨瑠璃には『南都十三鐘』の曲が見える。京傳は直接子供の慘話には觸れなかつたが、奈良の鹿殺しと獵犬の石子詰とに、この傳説を借用したのである。それから作中人物としての白炭の忠知は穗坂垣右衛門の主人としてこゝでは僅かに片影を示すだけであるが、これが現實の人であることは周知の事實である。『俳家大系圖』によれば、野々口立圃の門人で、神野氏通稱長左衛門、東武の人とある。「白炭や燒かぬ昔の雪の枝（寛文四年、松江重頼編『中山集』所載）の句で、白炭の忠知の名を得た。其角の『雑談集』によれば「霜月やあるはなき身の影法師」の辭世を詠んで切腹したと傳へられる。京傳も『近世奇跡考』の中で記述して居るが、こゝに現するのが時代錯誤である事は云ふまでもない。しかも作者はこの人物を文武兩備の典型的武士としてとりあげた。その全貌は後段を俟つく期待されて居るが、こゝだけでも情理を具へた人物である事は十分揃みとられる。

第二説話。卷二の後半「醉菩薩方便品」と云ふ第三章から初められ「剃度功德品」「姉妹本事品」「俠客提婆達多品」を経て、卷五の中「地獄信解品」と云ふ第七章までに亘り、梅津一家の浮沈を中心として取扱つて居る。即ち應仁の亂に際して梅津嘉門景春は戦利あらず岩倉山で討死する。こゝにかの頼豪院の咒咀による鼠の怪異があつて、景春は身を亡ぼすので、發端で示した照應の一端が仄めかされて居る。景春は死に先だつて一休の草庵に赴き後事を託し、引返して亂軍の中に仕れるのである。その妻此花は、幼い姉娘玉虫と妹娘乙星の二人を作つて逃れたが、道で賊のために非業の死を遂げ玉虫は捕へられ乙星は谷間に落ちる。そこへ長子彦丸がかけつけて母の亡骸を見、妹等の姿を失つて落膽し自殺せんとする。その時、一休があらはれて説得し父の遺言として佛門に入らしめる。

こゝに信越の國境に聳ゆる安計呂山に百魔の姥と稱する女が居た。人買を業として多く女兒を誘拐し、その容貌の美醜によつて藝能を授けたり水仕事に追ひ使つたりして、苛酷を極めるので山姥と呼ばれて居た。嘉門の娘玉虫は母を殺した有漏路太郎・無漏路五郎に捕へられてこゝに賣られ、名を紅兒くねなると呼ばれて歌舞音曲を仕込まれて居たが、痘瘡にかゝつて顔を損ねてからは、婢女として酷使され、病に染んでは物置に捨てられて、命も長くないやうに見えた。その頃七つばかりの女が賣られて來たが縁兒みどりと云つた。この兒が紅兒に同情し、山姥の折檻をも恐れず忍び寄つてはいろ／＼いたはつた。そこで互に身の上を語り合ひ、その臍帯を證據に玉虫乙星の姉妹とわかる。乙星は谷に落ちてから陸作なるものに助けられたが、その養父母にも死別し、善光寺へ行く途中捕はれたのであつた。姉は死期の近づいた

のを知ると共に、有漏路兄弟が母の仇なるを告げ、兄の行衛を尋ねて仇を報せよと教へて妹を逃してやる。それ早くも山姥が知つて追かけるが、通りがりの旅人が乙星を百兩に償ひ去つた。その留守に有漏路兄弟は山姥の財寶を奪つて遂電したので、山姥が憤激して居るところへ、望月家の役人が召拵のため立向つた。山姥はもと五條の遊女で一時岩芝と名乗つた事を口にし、「山巡り式」の立廻りを演じた後、行衛知らずになる。

話は轉じて彦丸の身の上になる。嘉門の遺言で一休の徒弟となるが、亂暴な處業が多いので遂に破門される。そこで大阪に赴き、知合である千日前の棺屋に居候となつたが、主人の亡き後は自ら主人となり名を悟助と改め、二十歳の春を迎へた。彼れは身の素性を考へ、僧俗の間を辿らんとて、月の上十五日は専ら勤行に力め、下十五日を俠客として送らんと決心した。その衣裳に野曠のびらの白骨を染め出したので評判となつて居た。かの堺に住む彦惣は名を塵右衛門と改めて今年三十八、香晒も三十六で一子小田井は年頃の娘となつて居た。ある日浪花の芝居見物の歸途、無頼漢のために難義して居るのを悟助のために救はれた。このならず者は舍利佛鬼平次・幻蝶次と云ふ奴であつたが、悟助を怨み、奈良街道深江の提婆仁三郎なる惡漢に復仇を頼んだ。三人は悟助の宅に踏込んだが、上の十五日中であつたので、彼は沙門の心持で無抵抗主義の下に忍辱して居た。しかし下の月になつた時、天王寺でかの三人を手ひどく懲らしめたが、その夜舍利佛と幻とは悟助を襲つて却つて殺される。悟助はたとへ下の月とは云へ、半ば沙門たる身が人をあやめた事を悔い、自刃せんとする處へまた一休があらはれ、彼等二人は有漏路兄弟で、彼は計らずも母の仇を討つた事になると教へた。こゝで悟助は再び一休の徒弟に歸る。この頃、一休は岩倉山から出て住吉の里に移り住んだ。當時堺高須の花街に地獄大夫と云ふ名高い遊女が居た。一休はそこに赴いて問答し、その凡庸でない事を知つて

法を説いた。久しからずして地獄大夫は悟道を得、自ら死期を知つてそれぞれに手配をする。一休その臨終に立合ひ悟助を引合はした。地獄大夫は乙星の後身で、兄妹計らず相逢ふ事を得たのである。大夫の遺言に任せ、人々悲嘆の中にその亡骸を八木郷久米田寺に捨てる。そこで九相の姿が次々に實現し、白骨連相に至つて一休が茶毘に附すると、煙の中から七星あらはれて天空に飛び去つた。

以上の梅津一門消息を第二説話層として段落をつける。この中から先づ素材の出典を調べると、安計呂の山の百魔と云ふ老女は云ふまでもなく謠曲『山姥』を踏襲して居る。これを岩芝の後身に仕立て殘忍酷薄の人鬼としてあらはし來つたのである。こゝで、乙星を救ひ善光寺詣の途中病死した女の名が、袖萩と云ふところから推測すれば、山姥の慘唐には『奥州安達原』（寶曆十二年八月竹本座、近松半二作）の鬼婆が反映して居ると云へよう。而して謠曲『山姥』が一休の作であるとの傳説が、京傳をしてこの題材を配置せしめた所以であらう。百魔の姥の配下有漏路無漏路兄弟の名は寛文八年刊『一休咄』（卷一の三）に見える。「有漏路より無漏路へ歸る一休み雨ふらばふれ風吹かば吹け」と云ふ歌から出たものであり、景春の詠とした「生れぬるその曉に死にぬれば今日の夕は秋風ぞ吹く」は同じく『一休咄』（卷三の一）の嵯川新左衛門の辭世を假用したものである。野晒と云ふ名も『一休咄』（卷二の四）に見える正月に髑髏を竹の先に引かけて人々を戒めた話を擬人化したものであるが、この人物が歌舞伎の上で有名になつたのは此作に胚胎する。次に地獄大夫の話は享保十六年刊『續一休咄』卷四「一休和尚泉州高須の町遊行の事に」所縁する事は明らかであり、一休が食べた鯉魚を吐くと生きて遊いだと云ふ話も亦『一休咄』に見えるが、これは元來『元亨釋書』に在る行基傳の譚案であらう。而してその説法の内、土佐某の畫賛から現世地獄相を説く有名な水鏡の法語は、同じ

く『一休咄』卷二の二に據つたものであり、禪の老嫗が美女を囹として僧を誘惑せんとした話に對する一休の批判も『續一休咄』卷二の二から攝取したものである。地獄大夫歿後の九相の敘述が佛典に據り、東坡の詩を踏まへて居る事は云ふまでもないが、京傳にして見れば既に二番煎じの譏を免れない。(即ち文化二年『櫻姫全傳曙草紙』の中で蝦蟇丸の妻小萩の死相として取扱つて居る。)又彦惣が堺で扇屋の鹿右衛門となつて居ると云ふ事は、衣笠一淳の『堺鑑』下(天和三年)に「一休和尚牀菜庵居住の時、當津甲斐町中濱扇子屋甚右衛門と云ふ者の所へ折々來臨し玉ひて、家内嬖しきを憐れみ玉ひ、白地扇子に烏或は銀豪繪など書き給へば、世人この扇子を賞翫すと云へり」とある巷談に據つたものであらう。この外、「女郎塚」は泉南郡久米田村の龍臥山久米田寺境内にあるもの(和泉名所圖會三三)、郡山の「犬塚」は聖徳太子の愛犬白雪丸を埋めた所(大和名所圖會、三)とあるのをこゝに附會したのに過ぎない。

さて梅津説話の中心は二つあつて、前なるを山姥の話とし、後なるを野晒の話とし、これを地獄大夫の話によつて一先づ結合して居る。即ち、こゝだけを取つて見れば、構想に多大の注意を拂ひ、筋書の濃淡が經緯してよくその布置を守つて居ると云ふべきである。たゞ一休傳説の持ち廻りに、附會の色調をあまりに強く打出して居る。安計呂山の場面點出の如きも、意表に出づるもので謠曲山姥が岩芝の後身とあつては少なからず呆然たらしむる。而して、梅津の二幼女虐待は、例の三莊大夫式の筆法で、何等の新奇もないが、陰慘な敘述には、やはり怪奇美に憧憬する時代の享樂主義の反映と見るより外はない。こゝで作者の得意の筆致は、山姥が子供達に遊藝を仕込む場面に於て著しく發揮されて居る。幼女の眉目形によつて、賣付けんとする場所柄を考へ、それ／＼當て込みの技藝をもつてすると云ふ着想は、京傳にふさはしい考案と云はねばならぬ。下の關では能囃を、江戸では催馬樂を、浪華瓢箪町では籬節を

また都の白拍子向には今様を、俗にくだけは文彌節の袖時雨を、下賤には比丘尼歌や鄙ぶり歌を配置して居るのは、いかにも適切で、しかもそれに當る女兒の容姿風情が刻明に描き出されてゐる。歌舞伎式の艶やかな見世場らしい氣分は否定出来ないが、やはり巧妙と稱して差支へない。特に辟田と云ふ醜い子供が「いかになよ。旅の殿さ、おくたばりであるべいに、おくはびらいだし召せ」云々の一節は、山姥の殘忍性と舞踊の滑稽味とが交錯して、一種の妖惑味を惹起する。しかしこの場面で、ある程度の矛盾を感ずるのは、山姥が一面老巧な遊藝のお師匠様の風格を具へて、ともすれば深山に巢を食ふ鬼女である本體から、脱却せんとする傾向がある事である。たとへ後で昔は京の遊女と自供せしめてゐても、それは單なる説明にしかなつてゐない。猶、紅兒の斷末魔に、一道の陰火閃々と燃え上り、虚空に笑ふ聲のするのは、鳥部野に會合した怨靈が豫言の實現を證するものであるが、餘りに唐突であり且その照應が機械的でもある。又縁兒出奔に際して、猿と鳥とが平常扶養の恩を報ぜんために、老女を惱ますのは童話型式に陥つたものであるが、微細な枝葉を以つて、説話をいやが上に紛糾せしめんと計る浪漫的作品としては類例の多い行方である。(京傳は文化元年の『優曇華物語』にも猿と鳥とを用ひて居る。)而して安計呂山の最後を飾る一段は、望月家の捕吏に圍まれた百魔姥の立廻りであるが、劍劇式活躍に詠曲山姥の「山巡り」を織り込んだのは、濃彩と變幻と相待つて所謂大向ふを唸らせる場面で、山姥の超人間的な風情が十二分であるだけ、一面に緞張芝居らしさを否み難い。

第二の中心點たる嘉門の長子彦丸を、野晒悟助として江戸見式の遊俠の徒と變化させたのは頗る思ひ付きである。悟助の風半態度はいかにもきび／＼として理想的仁俠の士たるに愧ぢない。香晒の娘小田井を軽く取扱ひ、特別にこれが因縁となつて悟助を戀ふる迄にしなかつたのは、たとへ後段で、小田井と佗助なるものの戀愛事件があるとは云

へ）常套に陥らしめないものとして京傳の腕を認めてやりたい。小田井の危難を救つた事が、敵役提婆の仁三郎を點出する素因を作り、更に二人の子分を牽き出すの契機とした構想もよい。しかも二人の子分が有漏路兄弟の馴れの果で、悟助の彦丸は知らず／＼、實母の仇討をした事としたのは悟助自身と共に誠に意外の感が深い。因果の糸が縦横に絡み纏るゝとは云へ、超人一休ならでは測知し能はざるところであらう。即ち構成上、人物の出没にかなりの異常が認められるわけである。梅津説話の終局として地獄大夫の事蹟を彦丸の妹乙星（綠兒）の後身に附會し、その禪機を詳密に寫して、説話結集の手段とすると共にこれまで一休を直接描出しなかつた埋合せに、今度は一休地獄兩者を中心として悟助を結びつけ、すべてを超自然的な色彩の下に置いて悟道達觀の域に安住せしめ、呪はれたる梅津一家を一休の法衣の袖に覆はしめたのである。菩提の題意に添ふものと云つてよい。

次に、第五卷の内八九十の三章（父母安樂行品・畜生勸發品・處女授記品）に亘る説話は堺の扇屋麿右衛門即ち彦惣の後日譚と、悟助のその後とを結んで、第一第二の説話層の終局とした。堺近くに住む浪人箕内の子佗助が土器賣として實體に働いて居るのを、扇屋の娘小田井が思ひをよせる。飼犬が媒して二人の仲が結ばれようとするとき、一休が心あつて妨げる。小田井が病に染んで苦しむとき、一休は教化して一條の因縁話をする。佗助は箕内の拾子で箕内の本名は穂波垣右衛門と云ひ、佗助は彦惣の長子でかの洞九郎に捨てられた者であつた。即ち小田井とは兄妹で、正に畜生道に陥らんとするのを救つたのである。犬は洞九郎に殺された獵犬の怨念で、罪なき若い二人に祟らんとしたものであつた。これより先き一休の命をうけた悟助は、二上嶽の谷に下り洞九郎の遺骨を尋ね、かの百二十兩の金をそのまゝ持返る。さきに香晒に五十兩を恵んだのも一休と知れ、扇屋夫婦は佛門に入り垣右衛門は歸參した。山伏姿

となつて猶惡事を働いて居た提婆の仁三郎は、再び悟助に懲らされるが、逃れて説話の筋を後に引く。しかし主要なる扇屋一家と梅津一門の話はこゝに一先づ終りを告げる。この構成の中、犬の怨念は持ち廻りが度を過して居るし、洞九郎の遺骸から得た百二十兩を五十兩は茶入の代として塵右衛門（彦惣）に、七十兩を落し主垣右衛門に返却する一休の取なしは、正當ではあらうがいかにも細かい。京傳が平常友人と會合するとき、その費用を正しく頭數に應じて割り付けたので、京傳勘定の流行語が生じたといふ逸話も思ひ出されて、微苦笑を禁じ得ない。——以上の中、『一休咄』から取材したものは一休と山伏の祈り競べの條（卷二の七）は、小田井病氣平癒の場面に用ひられ、かれに於て握飯で猛犬を手馴づける所がこゝではそのまゝに犬の怨念に悩む若い娘を靜める事に翻案され、土器賣を追かける話（卷二の十一）はこゝでは佗助のモデルに使はれて居る。

こゝで野晒の話が歌舞伎に波及した事に就て一言を挿んでおく。さきに『稻妻表紙』は劇中の名古屋不破の鞆當に至大の影響を與へたが、稻妻表紙の後篇『醉菩提』に於ける野晒悟助の説話も亦芝居の方面に採取されて多大の喝采を博して居る。元治二年正月、江戸市村座上演の『鶴は千歳曾我の門松』はそれで、河竹默阿彌の脚色である。曾我の名は云ふまでもなく正月狂言の縁起に因り、内容は酒屋又六の筋（一番目）と野晒悟助との筋（二番目）で、明かに醉菩提の翻案である。又六の話は第四説話屠として後に云ふ。この芝居でも後に野晒の筋だけを獨立させて『醉菩提悟道の野晒』とした。大阪千日前に住む俠客野晒悟助は一休の教化をうけてゐた。ある日住吉の社頭で、悪漢提婆仁三郎一味のものに難義して居る土器賣佗助とその娘お賤の父娘、及び扇屋の娘小田井とを助けた。二人の娘は共に悟助を思ひ染め、扇屋の娘は山ほどの結納を持つて押かけ嫁に來る。悟助は佛門の人の心を持してゐるので、毒帶は

せぬと云ふのを小田井が自殺しさうなので、遂に承諾する。一足遅れて来たお賤は妾にでもとて動かない。ところへ仁三郎一派が仕返しに来る。悟助は母の命日とて抵抗しなかつた。仁三郎は百兩の金の事で、さんく、悟助を恥しめた上、打擲して歸つた。お賤は身賣して百兩の金をと、のへる。その夜、悟助は九ツすぎて母の忌日の過ぐるを待ち四天王寺で仁三郎に復仇する。お賤は香晒によつて身請され、尋ねて来た悟助はそこで地獄大夫と兄妹の名のりをする。原作『醉菩提』と多小筋の改竄があつて黙阿彌式の構想が目立つ。この芝居の大切の淨瑠璃に『一休地獄噺』が添へてあり、作者はやはり黙阿彌である。高須の黒珠名屋の傾城地獄大夫が、一休に地獄極樂の法話を聞き、嘘も誠も過去も來世も地獄も極樂も、皆人の心のまゝに映るものと悟つて、一休・大夫、そこに居合せた悟助を初め、皆この惣踊になると云ふ仕組で、歌曲は富本の正本にあるが、源流は前に指摘したやうに『一休咄』卷二の「水鏡の法語」である。

六

第三説話。後帙上册の「災禍從地湧出品」「百蠻陀羅尼品」「瓜茄隨喜功德品」の三章に當る。佐々木家が中心であるが、この説話の初まる第十一章には冒頭に、白炭の忠知が住吉の御田植を奉行して歸路、雨やどりして地蔵の怪を斬る話が据ゑてある。次で佐々木家の事に一轉するが、當主は桂之助の兒月若で多門之助照滿と名乗つて居る。その妻折琴に伊勢大領國貫の子金藤太が思を寄せ、父が佐々木家攻略の計あるを幸に折琴が吉野花見を襲つてこれを掠奪した。然るに折琴護衛の士前司太郎が奮闘してこれを取返すと共に、金藤太を斬つて棄て、その亡骸を芳野川に投じた。

その時、芳野中院谷の辻堂で居眠りをする僧形の男があつたが、金藤太の骸から一道の心火があらはれてこの男の懷に入る。この僧は醉菩提の發端に見えた飾磨曾根松で、今は岩倉谷に庵を結んで名を宗玄と改めて居たが、折柄芳野に遊行して來たのであつた。折琴の一行は危難を逃れて、辻堂まで來ると宗玄が折琴に戯れかゝる。そこで又周章てゝ逃れ去るがその時柴舟と云ふ名香を落して行く。國貫はその子金藤太が佐々木の家臣のために殺されたと聞き、不意に立つた夜討にかけた。多門之助は自刃し、山三郎は亂闘の末自殺する。その際、黒雲の中に不破道犬一味の怨靈が喚聲をあげる。折琴は同助（鹿藏の子）に伴はれて伊賀路に落ちのび、小山三は母八重垣と百蟹の圖を奉じて河内に逃れた。前司太郎は自殺せんとしたが思ふところあつてか行衛をくりました。小山三母子の河内越は山に狒々があらはれると云ふので、その騒ぎにまきこまれた。山の宿に狒々が襲ひ來り、多くの旅人は殺されたり谷間に落ちたりする。實は提婆仁三郎の扮装で狒々出現の噂を種に、にせ物となつて旅人や村人を脅し、衣類金銭を奪ふのであつた。遭難者の中に河内國亦介なる札をつけた廻國者も居た。八重垣は小山三と分れゝになつて逃れたが、國貫方の捕吏のために捕へられた。折から本物の狒々があらはれ、捕手は散々になり、八重垣は山の辻堂まで逃げのびた。するとその紋所を目當てに背から斬りつけたものがある。自ら不破番作と名乗り、伴左衛門の弟だと云ふ。そこへ狒々が引返して來る様子なので、番作はあわてゝ逃れ、一足違ひに來た小山三は母の臨終を嘆き、再びあらはれた狒を退治する。佐々木家に關する説話は以上十一、十二、十三の三章に亘つて居るが、未だ終局を告げては居ない。元來、「發端」に於ける曾根松夢幻境の實現を主眼とするのがこの作品本來の面目とするならば、この佐々木家滅亡に關する記述には一大力點を置くべき筈であつた。少くとも梅津の遺族を描いただけの注意が、布置上にも人物の上にも拂はれぬ

ばならなかつた。然るにこの場合、説話の第一の頂點は芳野の花見で、それを全然宗玄折琴姫の高僧墮落説話に結びつけたのはどうしたものであらう。京傳が『櫻姫全傳曙草紙』を筆にしなかつた昔ならともかく、歌舞伎界に於ける怨靈劇の大立物「清玄」を又こゝに持ち出したのはあまりにも迂拙であり伸氣でもある。特に曾根松の後身宗玄はいかにも苦しい。尤も京傳に云はすればこれは「清玄櫻姫」でなく、明和二年九月竹本座の『菊池大友姻袖鏡』(近松半二)、芝居では『岩倉宗玄戀慕琴』(「花吹雪岩倉宗玄」)によつたと云ふだらう。これは菊池多門之助と大友の折琴姫とが許婚であつたが、多門之助は岩倉宗玄を替玉の婿入させると云ふ筋であるが、これらの人名や忠僕胴助などをそのまま流用して説話に變化を試みて居るけれど、畢竟清玄の傳統を享けたものである事は『曙草紙』に於けると同然である。作者の想像力がしかく貧弱とは思はないが、彼はとかく既成の歌舞伎劇が蓄へて居る素材に、餘りに頼りすぎる傾向がある。世間周知の事件、大衆渴仰の事象を、ある程度まで消化する事は作家として必須の條件ではあらうが、京傳にはこの二番茶を平然として服せしむる癖がある。夜討から敗亡離散への走馬燈的旋轉事件も相當に書きこなされて居るが、強ひて云へば一國一城の感じよりも小名の没落らしい氣分が濃厚である。折琴一行と小山三母子が思はず西と東に分れてゆくのは後日の伏線であり、前司太郎の亡命も亦同様として肯定出来るが、河内越の狒々は聊か茶氣がありすぎる。にせの狒、本物の狒、これが出たり隠れたり、目まぐるしい極みである。にせ狒が提婆だと云ふのも唐突であり、亦六の父亦介をこの手で殺すのも後段との照應ではあるが、下手に組んだ寄木細工である。番作なる男の出現も籤から棒である。偶然と突發との鉢合せで、一場一場が變幻を極めて展開するところが京傳の特色とは云へ、河内越の前後はその程度を過ぎたものと云はざるを得ない。たゞ江戸歌舞伎の夢幻的世界と、讀本の持つ

それとの相互關係が、こゝに介入する事だけは注意したい。而して佐々木説話は梵鐘の音の消えがてに消えるやうに終るべからずして終つたのである。

その小山三事件の後を享けて現はれるのが、忠知の家庭に起つた一挿話である。一體忠知の話は前に肩衝の茶入が欲しいとて家來を使ひに出した。その家來に關する物語が彦惣香晒と交渉を生じ、一休に結びつけられただけで、忠知に關する本格的な説話はなかつた。さきに佐々木説話の冒頭に地藏の怪を斬つたと云ふ一瑣話が置かれて居たが、その後日譚が第十三章としてこゝに納まつて居る。忠知の愛娘夕露は十七歳で逝き、祖母（忠知の母）が悲嘆にくれて宵々毎に墓詣りする。ある日途上で、亡き孫女に面影の酷似した巡禮の娘を救うて侍女とする。然るに祖母は病に染み日毎に瘠せ細る。折柄忠知は將軍家に召されて上洛中であつたが、急いで歸つて來る。その侍女を怪しいと見たが折柄一休が見舞に來て、足早に逃れ出る侍女を射よと云ふ。矢聲と共に仆れたのは古狐で、嘗て地藏に化け斬られたのが祟つたのであつた。これは全くの一挿話で、忠知の勇と一休の明とを裏書するより何物でもない。一休外傳の形式から云へば忠知の話はその一系列をなすものとして肯定し得るが、先きの佐々木説話に一休の投影が全然ないのは如何したものか。次の話に小山三を點じ、こゝで一休を濃厚にあらはす筈なのでよいと思惟したのか、ともかく説話層の比較的重大性を帶んで居るだけ、佐々木と一休とに關聯のないのは、大なる缺陷と云はねばならぬ。思ふに第三説話の取扱は、歌舞伎狂言の反照が頗る鮮明で、芳野花見前後の活劇と河内越の狒々を中心とする賑はしい場面は、その著しいものである。而して行文の匂ひに芳野では『雨月物語』の「蛇性の淫」の芳野を、忠知の母の墓詣では同じく「吉備津の釜」の荒井の里を聯想させる。猶、忠知の話では地藏の怪は『堺鑑』中の首截地藏を流用して居る。

「昔此所に茅屋の辻堂ありて西國巡禮高野山通路休所のためにありしに夜なく、奇恠の事あり、或夜道行く人と往會て化生の者を切留たり。明けて見れば即ち石地藏なり。それより今に首截地藏と云傳へり云々」とある。更に少女に化けた狐の怪は『續一休咄』(卷一の七)の狐の妖怪の一部分(蓬餅が青蛙となり、小判が柿の枯葉になるところの文飾はそのまゝである)と、『一休咄』(卷三の一)で嵯川新左衛門が貉の怪を射るの段とを補綴したものであり、『山城の瓜や茄子をそのまゝに手向にするや賀茂川の水』の狂歌は同じく『一休咄』(卷四の八)に見える聖靈祭の條から取つて居る。

七

第四説話。後帙下冊の「生死流轉藥草喻品」赤繩囑累品「鬻體化城喻品」に當る。こゝは酒賣亦六の話である。河内國中野村の亦六と云ふ青年はまじめに働いて居たが、父亦介は獵師で、これまで殺生の罪亡ぼしに三年前廻國に出たきり消息がない。亦六は近々春日の神事のために雉子を獲ると利があると聞き、或日禁野の邊りに三四羽の雉子を見つけ獵銃で打つた。近づいて見ると、色々の小習こせを繼いだ奇妙な衣物を着た片目の老人が倒れて居た。袂に藥草があるので老醫と知つたが、私かに木蔭に埋めて歸つた。それから程經た一日、川の堤で入水せんとする娘お三輪を助けたが、事情を聞くと父の木枯竹齋は二十日ばかり前に行末をくりましたので、暮しに困つた上、家主に追出され、途方に暮れて死を決したのだと云ふ。年頃風體が先日老人をつくりなので、事實を告げるつもりで家に伴ひ歸つた。しかし、明しかねて日を暮す内二人の間の縁が結ばれ一子杉太郎を設くるに至つた。その頃、亦介の死が判明する。あ

る日亦六は生駒山の明神社で若い武士の居眠りして居るのを見かけた。すると一匹の小蛇が武士の首に捲付かうとして、彼の懐中から發する怪しい光のために逡巡する。不思議に思つてみると、そのうち忍び寄つた數人の惡漢と武士とが斬合を初めたので、亦六は武士に助勢して敵を追拂つた。その武士の袖についた三階傘の紋所を見て、亦六は名古屋小山三なる事を確め、自ら乳母伏屋の子なることを告げて、家に伴ひ歸つた。その時、家では小蛇が杉太郎の足に絡まつて離れないのを、どこからか一羽の雉が來て蛇を喰殺した。見ればその雉子は片目であつた。亦六の家に滞在した小山三は、不思議な頭痛を病んで倒れこんだ。この病は無縁の人の首を七日祭れば癒ゆると聞き、いろ／＼捜し求めると、村外れに住む老婆が先頃藻屑川で自刎した骸がそのまゝになつて居るとて持つて來てくれた。當時一休は生駒山麓に巡錫して居たが、年の暮が迫つて債鬼がその庵に押しよせる。弟子の一人は僞つて一休の姿して御説教を初め、佛と鬼との戰爭の話や無常の話をして、遂に掛乞共を感激せしめ借金を帳消にさせる。後で一休は托鉢で得た布施をもつて商人共に償はしめた。

亦六の家では、ある日妻のお三輪が夫のひげを剃つて居るとき地震があつて咽喉を傷つける。亦六は後で竹齋を誤り殺した酬であらうと感じ、自殺して罪を謝せんとする。その時祭壇の首に聲があつて再三とゞめる。而してわれは竹齋の長子鷲丸で、流浪の末提婆の仁三郎と名乗り惡事の數々をしたが、河内越で亦介を手にかけてのも自分である。竹齋を殺したのは過失であるから、お三輪と添ひ遂げよと語る。亦六は猶自責の念から死せんとするとき、お三輪が縋りつく。そこへ村外れの老婆が飛込みその刃をとつて自ら咽喉を突く。これはと驚けば、われは山姥のなれの果で今宵は小山三の首をとつて伊勢大領の恩賞に與からんと忍び寄つたところ、計らずも皆々の述懐を聞いた。あの

提婆はわが子である。初め五條坂の白拍子の時、不破道犬に身請され妾となり、懐胎のまゝ故あつて醫師竹齋に縁づき、生み落したのが鴛丸である。などとその後の物語をなし、わが子の首を五緡の錢に代へて賣らうとした淺ましさと、年來の惡業の報とを思知つて、今果てるのだと懺悔する。折柄、頭痛癒えて小山三はその席につらなり、一休も亦こゝに來合せ、山姥に臨終の際の罪亡ぼしとて、曲舞を所望し自ら脇をつとめる。そこで竹齋提婆山姥共々一休の得度によつて佛果を得る。恰度夜が明けはなれて、元且の日ざし麗らかに、一休は門松の狂歌を誦しながら提婆の獨體を杖にかけて飄然として去る。

第四説話層に於ける亦六の性質は摯實な青年としてあらはされて居る。父が殺生の業を懺悔して廻國に出た後は家を守るに精勵であつた。然るにふとした事から誤つて人を殺した。父が發心の動機となつた獵銃を、知人から貸金催足のかたとして手に入れ、それが計らずも罪に導く誘因となつた。この事件發展の経路は自然に流れて居る。而して思はず殺した竹齋の塚に向つて、必ず御身の妻子のために討たれるからと誓ひながら、美しいその娘お三輪を偶然助けてからは、重い心を抱きながら何も知らぬお三輪の情に絆されて行く推移にも、弱き人間の果敢なさが認められる。しかし此際亦六の煩悶には數倍の深い省察を拂はなければならなかつたと思ふ。單に「いかなる過去の宿縁にや竹齋の死骸に對し、天地に誓ひし詞に背き、敵同士の惡縁と知りつゝ、結ぶ煩惱の絆の端ぞあさましき」とだけではあまりに皮相を述べたものと云はざるを得ない。しかも、この結縁が女の方から言ひ寄つた因に就いては、當時の英連者か現代女ならともかく、良家の子女としては時代の風尙から見て肯定し難い。むしろお三輪の方は素振程度にとゞめ、亦六の心的徑路を感情の激成に委せて漸層的に敘述すべきであつた。話の筋の足どりの速いこの種の作品であ

るから、心理描寫の精細は要求しないけれど、多少同棲から婚姻までの過程を示す幾段階は存在の意義を有する。

次に、生駒山の平岡明神に於ける格闘と百蟻圖の奇異とは黙認しても、小山三に纏つた小蛇が程を距てず杉太郎に絡まるのは煩雜である。その上にこれが伴左衛門の怨靈とあつては、今頃何處をまご／＼して居ると云ひたくなる。

艶女藤波の靈であつた『稻妻表紙』の蛇ならば認容するに躊躇しないけれど、總たぶさの犬の男が小蛇と化するのあまりに貧弱であり、第一緊密な情緒を惹起し得ない。小山三の病氣から首祭への渡込みも、首祭その者の奇異は別として無理はなく、そこから村外れの老婆を事なく誘引するのもよい。こゝで一休の挿話を入れて、年の暮の掛乞と御説教とを入れたのは、氣分轉換の効果を覗つたのであらうが、われ／＼はむしろ昂揚し來つた興趣を突如として肩すかしによつて打碎かれた感の方が強い。髭剃の場と、これに機因する亦六が「道念の目覺め」は契機としての確に把握したものと云つてよい。亦六が浪立つ胸を押靜めつゝ、想ひに耽る次の間で、妻のお三輪が事もなげに子供を癡かしてつてゐる場面は情味の豊かな世話場である。次で亦六が決意して自殺せんとするや、祭壇の首が口をきくのは、讀本としては肯定すべきであらうが、奇警な趣向には少なからず脅かされる。それから場面は急に人出入が賑かになり、自殺せんとするもの、するものが續出するが、これは作意に窮したものと見たい。老婆の懺悔で提婆がその子と知れ、しかもそれが不破道犬の胤であり竹齋の義子であると云ふに至つては、あまりに事象の交錯が極端に走つて居る。いかに色彩の強烈と感情の醜弄を特色とする讀本であつても、過ぎたるは猶缺陷として眺めねばなるまい。最後に、一休のワキで山姥の演ずる曲舞は、目まぐるしい活劇の後に來る悠揚の氣分を横溢せしむるものとして効果が著しい。而して天明けて元朝となり、飄然と去る一休は、その引込みの機會を確實に攫んだものと云はねばならぬ。し

かし小山三、亦六等その他そのまゝになつて居る人物の數人は、わけもなく取殘されて居る。作者が猶續篇五冊を企圖してその大筋を書きとめて居るのは、この擱筆の缺陷に氣付いて居る證據である。

この説話の主人公酒屋亦六の名は『一休咄』（卷二の十二）に見える。問答に來た僧を寺に待たせたまゝ門前の酒屋で酔ひこけて居た一休が、酒屋の亭主出で御醉眠御心よく侍りたるかと申しければ、扱もよき氣味やと一首よみて亭主に取らせけるは極樂をいづくの程と思ひしに杉葉たちたる又六か門と、あそばしければ、亭主よろこびけるとなり」とある條から、一人物を仕立てたもので、この狂歌は提婆及竹齋を教化する場に用ひて居る。竹齋が烏丸光廣の作と云はるゝ寛永の頃の假名草紙「竹齋」から出た事は云ふまでもないが、その姓として木枯とあるのは芭蕉の『冬の日』の巻頭の歌仙「狂句、木枯の身は竹齋に似たるかな」に據つた事も確である。その娘お三輪の名は「妹背山姥女庭訓」（明和八年一月竹本座、近松半二等）の人物杉酒屋の娘お三輪から着想したもので、それは更に「我庵は三輪の山もと戀しくば訪ぶらひ來ませ杉立てる門」（古今集十九、雜、讀人しらず）に胚胎して居る事は何人も氣付くところであらう。生駒山麓の一休の庵で掛乞共に談る地獄極樂の合戦の法話は室町期の草子「佛鬼軍」を利用したのにすぎない。この書はもと繪巻物として京都十念寺に傳つたもので、繪も文も一休の手に成ると云はれて居る。京傳がこの作爲を此所に挿んだ意圖も自ら明らかである。猶、亦介が發心の動機となつた話は、雄鳥を討つたときその首が見えなかつたが、翌年雌鳥を取つたときその翼の下からその首があらはれたので、悲痛の感に打たれたと云ふ「雁卒都婆」の因縁。竹齋の靈を弔ふ「雉子塚」。提婆の髑髏をも埋め、杉立てる門の歌意によつて杉を植ゑた「三本杉」。また山姥の死と共に心火が飛び出で、それが後までも業火としてあらはれたのは、平岡明神の油火を盗んだ瀆罪のためだ

と云ふ「河内國姥が火」の物語。山姥を葬つた「洞ヶ峠」。また惟喬親王以來の禁獵となつた禁野よみのの。これらの地方的傳説の攝取は皆『河内國名所鑑』（三田淨久、延寶六年刊、卷五・六）にその所縁を探る事が出来る。（雁辛都婆 中野村 謙良郡 雉子塚・三本杉交野郡、姥ヶ火河内郡）

而して、舅を雉子と思ひ鳥銃で打つた條は、寶曆十一年版の『童唄、古實今物語』卷五に見える松前屋長兵衛の話を探入れたものであるし、雉子に生れ代る話は『宇治拾遺』から脱化したものであらう。最後に近く、老女と一休との曲舞では、謠曲『山姥』の「遠近のたつきも知らぬ山中に」から「いとま申して歸る山の」までを謠はせて老女を昏倒させて居るが、この次の「山巡り」の文句は、既に安計呂山で彼女が姿を隠すところに採録して居るから、こゝでは省略したので、即ち巧みにこの曲を二分して利用したのであつた。猶、後世への影響としては前述の『鶴千歳會我門松』の芝居の一番目として仕組まれた酒賣又六で、後に『醉菩提新酒又六』となつて居る。筋は大體この小説を辿つて居るが、詳しくは「歌舞伎新報」(五八七號以下)を参照せられたい。

こゝで原典の『醉菩提傳』との交渉を一瞥すべきであらう。この點に就ては嘗て山口剛氏が指摘せられたやうに、その關聯の度合は案外に稀薄である。たゞ僅かに次の二三條に過ぎない。(ア)悟助が舍利佛などの惡漢を向ふに廻して扇屋の娘小田井を救ふの條は趙寛が李澤を懲らし、陶秀玉と云ふ娘をその戀人王宣教に媒する話から出てゐる。趙寛の俠氣が災して殺人の罪を犯し、王陶二人の密事が明るみに出たので、二人は情死するが、道濟の法力で蘇生し成婚する。小田井は佗助を見と知らずして戀したが、一休によつて畜生道に陥らんとするのを救濟される。扇屋の犬は洞

九郎の怨靈であつたが、陶家の犬は單に忍ぶ夜の邪魔者として趙のために殺された。「宣教秀玉双憐花」はかゝる程度の改竄をもつて攝取されてゐる。(イ)小田井に宿る犬の靈を一体が得度する條は、道濟が處女の瘡症を治療する話から出てゐる。道濟は裸となり病者の胸を壓し一喝し、心火によつて瘡虫を焼き殺すと云ふのである。(ハ)洞九郎が大金を首にかけたまゝ谷底で窮死する條は、張寛がある麵屋の廁で、人の忘れた財布を拾ひとり、翌日行つて見るとそこに縊死してゐる男を見た。それは財布の持主であつた。驚き恐れてゐる所へ、道濟が來て、この死者の前生は張の雇人で、張を殺して五十貫を奪つた事がある。今それを倍額にして返濟したのだと因果の理を示す。京傳はこの話を換骨したのであつた。

猶、『醉菩提』開卷第一の筆初めの「如是我聞佛門廣大なり。其一端を見て得たりとして忘想すべからず。」から「かゝるが故に佛菩薩、時々娑婆世界に垂跡して、種々法を説き或は神通を闡明して、濁世の愚庸を點醒し給ふ。是亦所謂遊戲三昧なりとかや」までの數行は、原典の冒頭を假名文に翻譯したものである。

八

翻つて全篇の構成に就て通覽する。この作品が高僧外傳の形式をとつた着想は面白いけれど、各説話と一体禪師との連絡は凡てに緊密でない。彦惣の話では、その子小田井に至つて初めて比較的密接な交渉を生ずるに止まり、大和の流離時代では素性の知れぬ修行者として極めて朦朧たる影を投げかけたばかりである。梅津の話ではその當初に景春との交誼があり、後には悟助及地獄太夫との關聯を生じて、これは纏絡に於て最も適切なるものを發見する。しか

しかかなり重大な場面をなす安計呂山では僅かに謠曲の匂ひを漂はせたにすぎない。白炭の忠知の話は本篇とは關係のないものであるが、一休は相當の印影を残して居る。亦六は話ではむしろ淡彩にすぎるが、最終の痕跡が漸くその濃度を償つて居る。かく一休の姿はそれ／＼に出現して多少の因果の糸を操つて居るが、『稻妻表紙』の續篇たる關係上、中心説話を以て目すべき佐々木家の興亡に於て、何等の消息を語らないのはどうしたものであらう。たとへ段後に名古屋小山三との微かな脈絡は生じても、それは問題ではない。この中心事件を全く一休から遊離させたのは、何と云つても一大缺陷と云はねばならぬ。又、かの『稻妻表紙』の佐々良一族の後日譚の如きは、白炭忠知よりも遙かに緊要な意義を有つて居ないだらうか。思ふに高僧外傳たる點に力點を置くならば、各説話の濃淡の度は變化あるものとして自由であるが、ともかく並列的に配置された以上、相互間の連絡はたとへ稀薄でも關はないから、超俗高德の人の逸話集の形式をとるべきであつた。しかしこゝに『稻妻表紙』の續篇と云ふ別個の制約があるからは、各説話の相互關係は極めて重大性を帯んで来る。即ち一休なる高僧は、單に超俗高德だけでは不十分である。事件の因縁を正當に判断し、人物の運命を豫言し、しかも邪を却け正を導いて、行くべき道を開拓し指摘しなければならぬ。一種の神格的風手を具備する事が必要である。この風手は事實上『醉菩提』には表現されて居るから、この點に就てはより以上に要求はしないけれど、これに繋がる各説話がいかにも整齊を缺き、相互の交渉も粗密その體を失して居る。その結果、有機的統一から遠ざかり、断片的説話の羅列、又は挿話の連続と云ふ印象が強く残される。而して作意の豫測を示すために冒頭に据ゑた六道の辻の怪異も、作中にあつての存在は極めて無力に、偶々虚空に笑ひ陰火と現はれるだけであり、その出現も必然的背景を有せず、取つて付けたやうな状態の下に取扱はれて居る。思ふに『醉菩提』

の主題としては、正に「惡靈の祟り」と「高僧救世の法力」との二つの力の闘争を中心に置き、そこから運命の種々相を描いて、因果應報の理を説くべきであつた。かく觀じて、彦惣、梅津、又六、佐々木等の各説話を眺め返すときそこに多大の不満を感じざるを得ない。

猶、豫定せる續篇の筋を見ると、小山三のその後とお國。折琴姫と宗玄の因縁。亦六の子杉太郎が新竹齋となる事。筑紫に於ける前司太郎の消息などあつて、雉川國貫を滅亡させ、執念深く跳梁する惡靈共の濟度に終結するらしいが、事實執筆しなかつたので加ふべき言葉もない。たゞこれまでに、本筋とあまり關係のない方面に低徊しなければ、強ちにこの續篇幾冊かを要求するに及ばなかつたであらう。わけて歌舞伎畑の宗玄折琴姫の如き、既に作者に『櫻姫全傳曙草紙』がある以上、割愛して憚らない趣向であつた。

然しながら、最初に云つた通り『醉菩提』は凝つた作品である。作者が甚大な期待の下に鏤刻の苦しみを嘗めた作品である。その意義とその結果の一分は、慥かに作品自身から享け取る事が出来る。要するに、此作は緻密な構成を持つとか統整せられた作品とかでなくして、部分的に妙所を持つつゞれ錦の作品である。目錄に記載せる品目釋義の如き各章の主題説明で、作者の意向を語るものであるが、内容はそれだけ闡明せられて居ない。たゞ品目の名稱を附會したと云ふだけである。而してその品目に拘泥する事が一方にはまた全體として關聯をおろそかにした結果となつて居る。かく考察すれば、猶更にこの一篇は徹底的に高僧外傳の型式をとるべきであつた事を痛感するのである。換言すれば高僧一休を中軸として各説話を放射狀に連結する機構が望ましかつたと思ふ。

附言。「醉菩提」出版事情に關しては「江戸作者部類」が詳しく語つてゐる。さきの「稻妻草紙」も後篇に當る「醉菩提」も、共に茅場町の伊賀屋勘左衛門板である。不破名古屋の鞘當を素材の一とした稻妻表紙を刊行するや、出版元の伊賀屋では父子の仲違ひを生じ、且程なく妻が病死した。書名の語呂が「不和な子や、否妻病死」となる。京傳もこれを氣にして縁起直しに筆を執つて「醉菩提」を作つたと云ふのである。事實如何はともかく、此の作の體裁を見るに、煩はしきまでに佛樣氣分が横溢してゐる。高僧外傳と云ふ核心はあるものゝ、まづ序文を誌した天地前後の空白には散蓮華の圖案があり、「新刻本朝醉菩提全傳」の標題の上には曼字模様が見え、目錄はすべて法華經の品目に準へた標名を附け、更に本文の標題には十六羅漢の名を角書とするなど、抹香の烟が濛々として追善供養の意味が隅々までも漂つてゐる。その他、繡像の配置に、自己宣傳めいた案文に多分の注意を拂つてゐる點から見ても、また畫家豐國を強要して描かした點に於て（尤も豐國の放漫と遲滞とが災したと云ふけれど）作者の凝り性の一方ならぬ様態から見て「作者部類」の言葉の強ちに虚妄でないとの感を抱かしめるのである。

○身邊多事、新稿期日に成らず、委員の要求の紙數に合致するため已むなく座右稿本の一節を抽いて責をふさぐ。

（十三年四月上旬）